

香良洲町の夏の風物詩と言われる伝統芸能。前年の収穫を感謝し、今年の豊漁、豊作を願い、毎年8月15日の夜から翌16日の朝まで、香良洲神社境内で奉納される。

やめると災いが起こるとの言い伝えもあり、江戸時代中期から大切に継承され、1970年、県の無形民俗文化財に指定された。

同町内の「馬場」・「小松」・「地家」・「砂原」の4地区4人、計16人の15〜18歳の若者が踊り子となる。

夕方各地区で「あしがため」のひと踊りをし、午後8時頃から同神社に宮入り。以前は、



西山光正さん提供



西山光正さん提供

この際に地区間の小競り合いが起きることもあり、「けんか踊り」という異名も生まれたそうです。

同日9時頃、くじ引き順を決める素籤(しろくじ)に続き、青年団の支部長が本籤(ほんくじ)を引き、一番を引いた地区から踊りが始まる。一番の地区の盛り上がりは並大抵でのものでなく、地域と一体化した祭だと実感させられる。

踊り子は、キジの羽で作った冠を着け、各地区自慢の胴巻き(馬場は「馬の絵」・小松「小の字」・地家「本の字」・砂原「龍の絵」)を付けた大きな太鼓を胸に巻きつけ、生の歌声に合わせて踊る。体を前後左右に

動かし、汗をほとばしらせて、全身で踊るのだ。その迫力に見物客も力が入る。

歌を歌うのは、各地区の踊り子経験者や踊りを守ってきた人たち。7月頃から、踊り子たちとともに練習し、伝統を「人」から「人」へと伝えていく。

4地区が交代しながら夜を徹

やぶねり

白塚町の氏神・八雲神社の夏祭りに行われる行事。同神社の祭神・須左之男命(すさのおのみこと)の八岐大蛇(やまたのおろち)退治を象徴するものとされており、毎年7月11日、悪病退散、海上安全などを願って行われる。

祭りの朝から昼ごろまでかかり、大蛇に見立てた「やぶ」を作る。8本の青竹を荒縄でたばねて、白ユリのつぼみ8本と津島神社(愛知県)のお札を封じ込み、むしろをかぶせて荒縄でぐるぐる巻きにする。青竹とユリが8本なのは、八岐大蛇になり

して踊り続け、すべての踊りが終わるのは翌朝となる。

激しく、エネルギーが注ぎ込まれて知られる香良洲の宮踊り。来年のお盆はあなたも若者パワースタイルに行ってみては?

お問い合わせは、香良洲神社 電話059(292)3905 まで。

白塚



西山光正さん提供

ぞらえているから。「やぶ」作りの後は、安全のため、練り歩く道筋の街角に丸太で組んだサクを作るそうだ。夕方になると、練りがスタート。10間(約18m)の長さ、大人が一抱えするほどの太さの「やぶ」8本を、合計百人ほど



西山光正さん提供

の若者がかきついて、揺さぶったり、突進したりして、威勢よく町中を練り歩く。掛け声は「エエヤナッチャ」。激しく練れば練るほど、ご利益があると云われ、若者のエネルギーがほとばしり、興奮した見物客からは歓声が!最後に傷ついた「やぶ」を海に流して、祭りは終わる。

漁師町らしい、荒々しく勇壮な祭りで、他ではあまり見られない「奇祭」とも言われる。来夏、あなたも見に行ってみては? お問い合わせは、八雲神社 電話059(292)1502 まで。

一身田寺内町まつり

一身田

◇一身田(いつしんでん)という地名

津市北部に位置する一身田町といえは、「ああ、高田本山さんのあるところ」と、うなずく人が多い。しかし、この珍しい地名の由来をご存知だろうか。奈良・平安というはるか昔に、政治上功績のあった貴族に田を与える制度、または律令制度の「三世一身の法」の、「その身一代に限って与えられた田」からついたと言われている。

このように「田」が地名の由来となるほどの農業集落であった一身田が大きく変わったのは、ここに高田専修寺(せんじゅじ)第十世真慧上人(しん



西山光正さん提供



西山光正さん提供

ねしょうにん)による無量壽院(のちの一身田専修寺)が建設されたことによる。

◇真宗高田本山専修寺

高田専修寺は、親鸞聖人(しんらんしょうにん)が夢のお告げを得て、現在の栃木県芳賀郡二宮町高田に建立した寺院。その後、次第に発展した高田教団を一段と飛躍させたのが前述の真慧上人で、東海・北陸方面に教化を拡げるとともに、朝廷の尊崇を得て、同寺は皇室の御祈願所ともなった。

当初は伊勢国内の中心寺院に過ぎなかったが、関東の本寺が兵火のため炎上したため、本山として定着した。

◇一身田寺内町

一身田はこうして同寺の「寺

内(じない)町」として発展することとなる。寺内町とは、戦国時代、浄土真宗などの寺院の境内地という名目で建設された自治都市で、濠・堀などで防御された閉郭(いかく)都市のことを言う。

一身田の場合、今も濠(かんどう)が町の周囲全体にめぐり、外部との遮断がはっきり残っている点で、全国でも閉郭の保存が大変良好と言われ、古い寺内町の町並みや雰囲気がよく残っている。

◇「寺内町の館」

このため、地域特有の歴史、文化等の紹介、文化財の保護、また住民の交流の場とするなどの目的で、2002年に「津市一身田寺内町の館」が誕生した。江戸末期の町並みの復元模型の展示や歴史紹介のビデオ上映もあり、町内の見所を紹介する「案内ボランティア」のガイドを受けることもでき、(1週間前までに要予約・料金無料)同町の散策には外せないポイントとなっている。場所は同寺の斜め向かい。月曜休館。



西山光正さん提供

◇寺内町まつり 例年11月の第2日曜(今年は9日)の午前9時から開催されるのが「一身田寺内町まつり」だ。地元いろいろなものに触れて、交流を深めることを目的に、97年、「街道まつり」としてスタート。翌年、現在の名前に変更し、今年で12回目となる。町全体を使っている祭りで、毎年多くの人でにぎわっている。

同寺唐門前の駐車場にはステージが設けられ、唐人踊などの伝統芸能や、各種団体の音楽や踊りの発表などが行われる。みこしが町内を練り歩き、祭りの雰囲気を盛り上げる。

一身田を描く絵画展や俳句の会など、文化的な発表に触れて、芸



西山光正さん提供

術の秋を実感したり、カラオケ大会で自慢のノドを披露したりするのめたのしい。町内を走る手づくりの汽車は子どもたちに大人気。「まちかど博物館」では珍しいものを発見できるかも? 地元商工会の物産のほか、津市の特産物や友好都市・北海道上富良野町の物産を販売するコーナーやおいしい食事ができる飲食コーナーも見逃せない。昨年末に平成大修理も完了した御影堂(みえいどう)や趣のある格子戸や土蔵の町並みを眺めながら、秋の1日を過ごせば、「ホッと」するに「一身田」というキャッチフレーズを実感できるのでは? お問い合わせは、津市文化振興課 電話059・229・3250、寺内町の館 電話059・2333・6666まで。



◆ 関西の難井沢

夏でも爽やかな風が吹き抜け、平地よりも4度ほど低い。

「関西の難井沢」とも言われる青山高原は、津市、伊賀市にまたがる高原だ。至平寺目青山園定公園の中心にあり、笠取山を主峰とする折引山塊一帯に、南北約10kmにわたって広がる。標高は700〜800m。山頂付近からは伊勢湾一帯を見渡すことができる。

◆ 自然を楽しむ

春は色鮮やかなツツジ、秋は風になびくススキ、そして、冬は木々を白く染める樹氷と、四季の移り変わりが楽しめることで人気のスポット。ゆったりした格好のため、ハイキング、ドライブを楽しむ人が多い。

◆ 風の通り道

近年、同高原の代名詞となってきたのが「風車」。このあたりは日本海と太平洋の間の風の通り道となっており、安定した風速が得られるので、1999年に4基の風車を稼働。自然のエネルギーを利用した、廃棄物ゼロ、環境に優しいクリーンなエネルギーを生み出すことで注目されている。現在はその数、32基。国内最大規模の風力発電所といえる。

◆ 青空と白い風車

ハイカーやドライバーを頂上付近で出迎えるのがこの風車群。青い空と緑の木々に、白くスマートな姿が映える。周囲の風景に溶け込むよう配慮されたシンプルなデザインが美しい。



地上から最頂部までは約10分、近くまで行くと、その大きさに驚かされる。

同高原には、第1〜第6駐車場に加え、測量の基準となる「三角点」、車の管理棟付近の、計8つの駐車場がある。それぞれ眺めが異なるので、見比べてみては？

◆ 青山から神原へ

青山高原から、「大滝」「小滝」のマイナスイオンを浴び、雄大な自然を楽しみながら、約9kmの自然歩道を歩くと、そこは津市神原町。心交わらぬ温泉街だ。

◆ 日本三名泉のひとつ

「湯はななくりの湯。有馬の湯。玉置の湯。」

『枕草子』に記されたのは、

ご存知、平安時代の才女・清少納言。この「ななくりの湯」が神原温泉だと知られている。

昔、このあたりは周辺に伊勢神宮へ奉納する食べ物を作る7つの「御厨（みくりや）」（台所の意の敬語的表現）があった



とされること由来して、「七楽」と呼ばれた。その地名を取って「ななくりの湯」という呼び名ができたようだ。

◆ 湯の湯

同温泉の歴史は古く、平安時代には神原湯（とうじぼ）と名づけていたと言われる。またかつて伊勢参りをする人たちが、「湯ごり」と言って、都から伊勢の田に入ったとせらにある同温泉で身を清めたとから、地元では「宮の湯」とも呼ぶ。

◆ 美人の湯

泉質はアルカリ性単純泉。皮膚病、神経痛、リウマチ、婦人病など多くの効能があるが、一番人気は「美肌効果」ではないだろうか。無色透明で、なめらかな肌ざわりの湯は、肌をツルツルにして

くれると評判。「美人の湯」と言われるゆえんだ。

同温泉旅館組合に属する温泉旅館は現在8軒。古民家を使った料理やペット同伴可、親切露天風呂など、特色はさまざま。日帰り入浴施設も3軒あり、エステや砂風呂も楽しめる。昨冬、もんの女将（おかみ）が果敢って「女将の会・糸さくら」を立ち上げ、満足いただけるおもてなしのため研修に励んでいる。

清少納言に思いをはせながら、美人の湯を堪能してみてください。

お問い合わせ先

津市久留総合支所・産業環境課  
☎059(225)8846

同温泉旅館協会  
☎059(252)0017

